



双塔

カトリック新潟教会

2016年3月
No. 334

荒野と四旬節

主任司祭 ラウル・バラデス

今年も四旬節がやってきました。教会全体が復活祭への準備、神に立ち返る機会、洗礼の更新など、この典礼の季節がもたらす豊かな恵みを一つ一ついただき、それに生かされて歩むように招かれています。

毎年、四旬節第一主日の福音はイエスの「荒野」での闘いを思い起こさせてくれます。主イエスは荒野での誘惑に一つ一つ神のことばの力によって打ち勝ってから宣教活動を始めました。

聖書では荒野とは神のことばに聞き従う所でありながらも神に逆らった場でもあります。神との契約を結ぶ所で、偶像をたてて礼拝した所でもありました。神の優しい思いやりと神の力強い怒りを体験する場所です。

初代教会では街を離れて砂漠で生活する人々が大勢いました。男女を問わず、福音の教えを厳密に守る決意をしたこの信徒たちは修道生活を発展させたのです。

その中からキリスト教的完徳、靈性に優れた修道士が「荒野の教父」と呼ばれています。彼らの「荒野の靈性」は修道生活の土台にあるといえるほど、教会にとって永久の宝なのです。

「修道生活の父」として知られる聖アントニオはある日、祈りの中で悪魔が人間にしかけるすべてのわなと誘惑を見て恐怖のあまりに「主よ、この誘惑と罠に打ち勝つのは誰ですか」と悲鳴をあげました。すると天から声が聞こえた。「謙遜な人々である！」と。

荒野にあって、人間は独りで生きることはできないと知り、弱さと無力を実感しながら神だけに頼ることを学ぶようになります。謙遜になった人こそ他の人の弱さを理解し、それを背負うことができるのです。自分に頼らず神の助けを求める人こそ誘惑と試練をのり越えられます。それは自分の動力の結果ではなく神の恵みの働きのおかげです。

私は学生時代に「砂漠からの手紙」という本に出会いました。イタリア生まれの著者カルロ・カレット師は熱心に教会で活躍した後、44才の時に主の呼びかけを感じて「イエスの小さい兄弟会」に入会するためにサハラ砂漠で隠遁生活を始めました。本の中で主の呼びかけをこう表しています。「すべてを捨てて、私と共に砂漠にくるがよい。もうあなたとの活躍を望まない。ただ、愛と祈りだけを望む」。

私は大した活躍はしていませんが今年の四旬節にイエスと共に砂漠に行ってみたい。主の謙遜を学び、愛と祈りのうちに。



そよかせ便り



■ 灰の水曜日 ----- 2月10日(水) 10:00 -----

前夜の雪で白い装いの朝。四旬節の初日となる「灰の水曜日」のミサは、菊地司教様の司式で捧げられ、新潟教会をはじめ青山や寺尾、花園教会などから信徒が集まった。

ミサの中で、司教様は高山右近の列福が承認された話題を取り上げてお説教を始められた。「現実的判断のために信仰における妥協を重ねている私たちに、右近は生きる姿勢の模範を示している」、「四旬節の間、神のいつくしみに包まれて信仰の根本を見直しましょう」と話された後、「回心して福音を信じなさい」と唱えながら、司祭や信徒らの頭に回心のしるしの灰を掛けられた。

■ 合同洗礼志願式 ----- 2月14日(日) 9:30 -----

新潟教区の「合同洗礼志願式」が、菊地司教様司式のミサの中で行われ、洗礼志願者6人（新潟教会4人、新発田教会2人）とともに、聖堂には沢山の人が集まった。福音朗読後、「洗礼志願式」にあたり司教様は洗礼が共同体の中でなされ、カテドラルに集まる意義を話された。洗礼志願者一人ひとりの意志の確認が行われ、それぞれ入信の秘跡に与る署名を行った。信条の授与は会衆が一節ずつ唱え、それを洗礼志願者が繰り返す形で進められ、最後に「洗礼志願者」の油で塗油が行われた。

